

オペラ《ベアトリーチェ・デイ・テンダ》

作曲：ヴィンチェンツォ・ベッリーニ (1801~1835)

台本：フェリーチェ・ロマーニ (1788~1865)

初演：1833年3月16日 ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場

《解説》

ベッリーニの全十作品中、第9番目に位置するのがこのオペラである。そしてまた長年の仕事上のパートナーでもあった台本作家ロマーニとの最後の共同作業となったオペラでもある。

主人公のフィリッポ・マリア・ヴィスコンティ公爵とその妻でテンダ家出身のベアトリーチェは、歴史上でも実在の人物である。これ以前にもオペラ史上では多くの歴史上人物の物語が取り上げられてきたが、当時誰もが知っているようなイタリア国内の歴史的事件をオペラの題材にしたのは《ベアトリーチェ・デイ・テンダ》が初めてだとされている。

初演でヒロインを務めたのは、ベッリーニの作品で既に《夢遊病の女》と《ノルマ》でヒロインを創唱した歴史的名歌手ジュディッタ・パスタであった。ベッリーニが作曲に当たってパスタを念頭においていたことは間違いない。ベッリーニのオペラのヒロインの中でも、最も高い技術力を求められる音楽が要求されていると共に、その偉大な女性像はノルマにも匹敵する風格が求められている。

我が国では、以前二期会によってハイライトによる演奏会形式の上演が実現していたが、合唱を含めた全曲演奏は今回が初めてである。

《ものがたり》

オペラの舞台となるのは15世紀初頭のミラノ。当時のイタリアは貴族の領主によって支配される都市国家の寄り集まった状況であった。北イタリア最大の都市国家ともいべきミラノを支配していたのは、フィリッポ・マリア・ヴィスコンティ公爵。優秀な部下であった將軍ファチーノ・カーネの力によって内紛を見事に収めたフィリッポは、カーネの死後彼の妻であったベアトリーチェと結婚していた。

ベアトリーチェと結婚して領国の基盤を安泰にしたフィリッポであったが、強力な権限を持つベアトリーチェに不満を抱いていた。一方王妃の侍女であるアニエーゼに心を寄せていたフィリッポは、どうにかしてベアトリーチェの権威を貶めようと考えている。

アニエーゼはヴェンティミリアの貴族オロンベッコを密かに慕っており、彼に秘密の手紙を送って逢い引きを画策する。オロンベッコはその手紙がベアトリーチェからのものかと思込みやってくるが、オロンベッコが愛しているのは王妃その人だと知って復讐を誓う。いずれの関係も一方的な愛情によるものであるが、嫉妬に駆られたアニエーゼは二人の不倫を捏造してフィリッポに告発する。フィリッポはこれを政治的に利用しようとする。

捕らえられた王妃は無実を訴えるが、一方オロンベッコは拷問に耐えかねて不倫を認めてしまい、やがて開かれた裁判で反乱の罪を着せられた二人は有罪を宣告されてしまう。これが冤罪だとわかっているフィリッポは死刑命令書に署名することを躊躇するが、領国の安泰のために署名してしまう。一方アニエーゼは自らの犯した罪に慄き、処刑台に引かれていくベアトリーチェに罪を告白する。ベアトリーチェは快く彼女を許し、毅然とした態度で処刑台へと引かれていくのであった。

《出演者》



出口 正子
(ベアトリーチェ)



坂本 伸司
(フィリッポ)



鳥木 弥生
(アニエーゼ)



琉子 健太郎
(オロンベッコ)



青柳 明
(アニエーノ/リッツアルド)



佐藤 宏
(指揮)



村上 尊志
(ピアノ)

南條年章オペラ研究室 演奏会のお知らせ

「2019 オペラ・コンサート」

2019年4月3日(水) / 5日(金)

銀座 王子ホール 18:30 開演 (18:00 開場)
4,000円 (両日通し 全席自由)

「ピアノ伴奏演奏会形式によるオペラ全曲シリーズ Vol.19」
ヴィンチェンツォ・ベッリーニ全オペラ連続演奏企画 第9回

ベッリーニ 《ノルマ》

ノルマ：佐藤亜希子 アダルジーザ：大柴朋子
ポッリオネ：琉子健太郎 オロヴェーゾ：坂本伸司
クロティルデ：藤崎純子 フラーヴィオ：青柳 明
指揮：佐藤 宏 ピアノ：村上尊志
合唱：南條年章オペラ研究室メンバー

2019年秋(予定)

王子ホール(予定)